

スタンダールの「数少ない幸福なる人々」

—シェイクスピア『ヘンリー五世』をめぐって—

市川 裕見子

スタンダールが自らの作品の末尾に、英語で「To the Happy Few 幸福なる少数の人々へ」という献辞を付したのは、有名な話である。それは50代半ばでものした終生の傑作『パルムの僧院』（1839）の巻末に記されたばかりでなく、『ローマ散策』（1829）と小説『赤と黒』（1830）の末尾にすでに繰り返し現れている。

しかし、そもそもスタンダールがこの献辞を思い付いたのは、スタンダールが33才の時、1816年に遡るのである。彼は近しい友人クロゼに宛てた書簡の中で、今自分が出版しようとしている『イタリア絵画史』を、皇帝ナポレオンに捧げたい、しかしそれがどうしても不都合ということであれば、かわりにこの書物の巻頭に、To the Happy Fewの言葉を置きたい、2年来あたためてきた献辞だから、というのである。そして「この辞がこの書物の全てを語り尽くしている。私はこの書物を感じやすい心をもった人々に捧げるのだ。」と語っている。¹

1816年当時といえば、ナポレオンがその前年に配所エルバ島を脱出したものの、百日天下も潰え、ついにセントヘレナ島に流された翌年のことである。そのナポレオンへの献辞を巻頭に掲げて書物を刊行するというのは、政治状況からして気違い沙汰にも等しい行為であり、というより、検閲制度からして不可能なことであつた。出版を手伝っていたクロゼが容認するはずもない。

スタンダールは弱冠17歳でナポレオン革命解放軍のイタリア遠征に従軍し、そのイタリアで青春の覚醒も陶醉も味わって、その後も間欠はありながらナポレオン配下で順調な軍務生活を過ごしていた。それが後に自伝に「1814年4月、私はナポレオンとともに失墜した。」²と書く通りの事態となり、ナポレオン没落以後は、あえて公職につくことをいさぎよしとしなかった。少なくとも復活した帝政下で、任官運動にやっきになることはなかった。1815年2月にナポレオンがエルバ島を脱出し、パリに出現した折には、彼は馳せ参じようとしたものの、当時の恋人に押しとどめられて断念している。結局ナポレオンはあっけなくウォータールーで敗北を喫し、二度と再び政治の表舞台に立つ道を断たれてしまうわけだが、スタンダールがかつて配下として仰ぎ見ていたナポレオンに、その人のもとで青

春を味わったイタリアの地の絵画史を捧げたいと思う気持ちは、嘘のないものだったろう。そこにはスタンダールらしい熱烈な党派精神と、個人的賛嘆の念、愛惜と忸怩たる思い、判官蟲質と反逆精神のないまぜになった気持ちがあったことは、想像にかたくない。そしてそれがかなわないのならば、ナポレオンのかわりに、The Happy Few 少数の幸福者にその書物を捧げたいというのである。

結局この際にはそれは『イタリア絵画史』第二巻の巻頭のエピグラフとなり、それから10余年後の『ローマ散策』および『赤と黒』で末尾の辞となるのだが、それからまた10年後の晩年の傑作『パルムの僧院』の結びに、再び我々がこの献辞を見ることを思えば、スタンダールはその執筆活動期のほぼ全期間を通してこの献辞を脳裏に描いていたと見なして差し支えないことになるだろう。

ただ、あらためて考えてみれば、この献辞は果たして献辞と呼ぶにふさわしいものだろうか。そもそも献辞は特定の個人を名指しするのが通例である。それは古く古代ギリシャなどで、演劇を始めとする芸術作品が神に奉納されていたことに端を発しているのかもしれないが、近世の印刷技術による書物の普及の頃から、捧げられる相手は神にとってかわって、文学者を擁する王侯貴族のパトロン達となった。詩人はいわば神に見立てる形で王侯貴族に自作を献じ、こう言ってよければその見返りに、庇護と愛顧を願い出たのである。また特に恋愛詩などならば、情愛をかけてくれることを願って、当の想う相手に捧げられたであろうし、近代に入っては存命の如何にかかわらず敬愛する先人や恩師、恩人などに捧げられるようになり、また現代では友人や家族、恋人の名も多く見られるようになった。いずれにしる作者は特定の人または人々の顔を脳裏に浮かべて書物を捧げようとするのであって、スタンダールが The Happy Few という時、具体的な人の姿を浮かべているかどうか、どうもよくわからない。というより、自伝作品『アンリ・ブリュラールの生涯』の読者を思い浮かべて、「誰か私の好きな人、例えば罗兰夫人や幾何学者のグロ氏のような人々」と、懇意というわけではない著名人の名を揚げ、「しかしこれを読んでもくれる未来の読者は、まだ10才か12才というところだろう。」³と書くスタンダールであってみれば、彼が自作を捧げる相手とは、彼の心にかない、心を通わすことができるであろうと「想定する」人々に違いないのである。

これは献辞をひとつの文学形式もしくは作法という観点から見た場合、きわめ

て奇抜で独創的な型の導入であったことが知られるのであり、このような画期的(?)な献辞の発想が、当時のいわば文学通の人々の間で話題になったとしても、驚くにあたらない。スタンダールが『恋愛論』で用いて、後に有名になった「結晶作用」という言葉も、スタンダールが出入りしていた当時の文学サロンなどでは、ちょっとしたセンセーションを巻き起こして、流行語になったものだった。恋愛心理の状態をさす言葉しかなかったその時代に、その心理の生成発展の過程そのものに着目して表現を与えた、すなわち命名したということは、きわめて近代的な心理観察の所産であって、当時はやはり同じように人の意表をつく、いわば奇想だったのである。この The Happy Few という言葉も、スタンダールが文学サロンなどで話題にしたらしく、1828年にはメリメら友人たちが用いて、サロン仲間では一種の流行語となっていたことが知られている。⁴

ところで問題は、スタンダールがこの英語表現をどこから借りてきたのか、ということであるが、研究者の間では、シェイクスピアの『ヘンリー五世』とゴールドスミスの『ウェークフィールドの牧師』との間で意見が分かれている。いずれゴールドスミスの言葉も、シェイクスピア『ヘンリー五世』の有名なせりふから取ったものであるが、スタンダールがどちらを念頭においていたかとなると判然としない。出典についてスタンダールは書き残していないからである。

スタンダールが両作品をともに知悉していたことは疑いがない。コスモポリタンであった彼は、イギリスの文壇の動向にも通じていて、また文人にも知己があり、この半世紀前の劇作家で小説家だったゴールドスミスのことをよく知っていた。現に20代の初めに、独自の英語習得法として『ウェークフィールドの牧師』の最初の4ページを丸暗記するということをした、と自伝作品『アンリ・ブリュラルの生涯』に書いているばかりか、⁵ その『アンリ・ブリュラルの生涯』の下書きには、官憲諸氏に宛てて、副題として、「本人自ら執筆、『ウェークフィールドの牧師』を模した小説作品」、「特にその純朴なる感情を」と説明を加えようとしたほどである。⁶ もちろんこの発言の裏には、当時の官憲の検閲を嫌って、あくまで政治的な意味合いのないことを強調するためもあったろうが、スタンダールがこの小説の主人公プリムローズ、すなわち野人の面影を宿した、朴訥で無骨でありながらユーモアがあり闊達で、時節に動かされない頑固さがある一方で、センチメンタルといえるほどに家庭的愛情に満ちたこの田舎牧師に、ある種の愛

着と郷愁を覚えていたことは間違いない。「純朴な pur」という言葉をここで使っているのは、「ひなびた、素朴な」情を持った、の謂いだろう。スタンダールは学校以来の長年の友人クロゼを才知も情熱もありながら、気取りがあつて緊張体質と見ており、特に妻とそのお仲間の影響が大であるとして、彼に「気楽、闊達、陽気、つまり『ウェークフィールド』のような品のある気安さがあればいいのに」⁷と惜しんでいる。革命以降のフランス社交界にとにかく見られた、情感乏しい気取りと堅苦しさに對して、しばしば嫌悪感を吐露するスタンダールにとって、『ウェークフィールドの牧師』の世界は、人間関係に自然な情感の流れる、ひとつの「癒し」を感じさせてくれる世界だったのではないだろうか。彼は作者のゴールドスミスその人についても、一つのエピソードを、わざわざ書き留めている。⁸ それはゴールドスミスが知人のジョンソン博士らと一緒にイタリア式からくり人形を見にいった折の話で、一同人間そっくりに動作や仕草をする機械仕掛けの人形に驚嘆し、帰りに寄った居酒屋でも博士と友人は感心することしきりで、博士が「きゃつが警棒を振り回すことと云ったらどうだ!」と言うと、ゴールドスミスは「警棒を私によこしてくれ。私だってうまく振り回してみせるさ。」と言ったという。スタンダールはこの話を、他の者が誉められるのがねたましい、というゴールドスミスの性格を端的に表わすエピソードとして『サミュエル・ジョンソン伝』から英語のまま引いているが、この、人間に多かれ少なかれある妬みの感情が、ゴールドスミスにあつては陰湿どころか、稚氣あふる可笑し味を湛えたものであったところに、スタンダールは感慨を覚えている。ここからもスタンダールが『ウェークフィールドの牧師』に對して抱いていた印象が覗われるのである。

それではシェイクスピア作品についてはどうかと言えば、スタンダールは少年の頃に仏語訳のシェイクスピア全集を読み漁って以来、青年時には自分も劇作家となる志を立てて原作を熟読し、後年も折りにふれてひもといていた。そうしたシェイクスピア作品の中で、この『ヘンリー五世』はもちろん一度ならず読んだ形跡があり、特に王座につくことを宿命づけられた者としてのヘンリー五世の性格や、彼の放蕩時代の悪仲間ファルスタッフに対するスタンダールの関心は高い。しかしそれはどちらかといえば『ヘンリー五世』よりもむしろ、ヘンリー五世がまだ王子ハリーだった頃の『ヘンリー四世』に含まれる内容であり、ここに引用

されている「The Happy Few」を含む有名な演説のシーン（『ヘンリー五世』第四幕第三場）へのスタンダールの直接の言及は見つからない。

スタンダールがどちらの作品から「The Happy Few」の言葉を引いたのか、という問題になると、プレイアッド版の注釈ではポール・アザールの『ウェークフィールドの牧師』説に、クラシック・ガルニエ版のそれではルイ・ジレらの『ヘンリー五世』説にとそれぞれ軍配をあげているけれども、特にその根拠を示しているわけではない。最初にも述べた通り、スタンダールの残した記録の中には、どちらから取ったという証拠も見つからないのである。

ただ、この言い回しが、ジェレミー・ベンサムのやはり有名な言葉、「最大多数の最大幸福（the greatest happiness of the greatest number）」への、アンチテーゼとは言わないまでも、一種の揶揄を含むものであったことは、容易に想像がつく。スタンダールは当時時代の先端を行っていた、この英国の哲学者にして法学者の書籍には注目して目を通していたし、近代性の遅れた事物や人々を目の当たりにすると、ベンサムを読むがいい、とやや皮肉っぽく勧めてもいる。⁹ 彼の時代は政治・社会思想の点からいえば、フランスなどの大陸よりイギリスの方が先進的だったのであり、コスモポリタンとして同国人より早くそれらに接していたスタンダールは、その代表選手であるベンサムの功利主義に対して、決して正面切っては反論していない。しかしたとえば『恋愛論』の一節、スタンダールが懐かしげに中世の南仏プロヴァンス地方で行われていた古式ゆかしい恋愛作法を語る一節では、それを彼と同時代の、即物的になりかねない恋愛模様と比較して、「われわれは偽善や禁欲主義においては進歩したが、そのぶん美德に対する尊重の念が増したわけではない。」¹⁰ と嘆じている。この書の注釈者は、スタンダールの「禁欲主義における進歩」という発想を、ベンサムの著作『法の原理』（1802）の第一卷第二章「禁欲主義の原理」から得たとしている。すなわちベンサムは、法の原理に従う者は、「すべからず快楽を減殺するものを賞賛し、快楽を増大させるものを難ずるべし」とした上で、法の目的は「最大多数の最大幸福」にある、と説いているのだが、スタンダールは上の文章に続けて、「自然に反して、罰せられないはずがない。ただそれだけ地上に幸福が少なくなり、高潔な靈感がめっぽう少なくなっただけである。」と付け加えている。幸福をあくまで個人的なものと考えていたスタンダールにとって、ベンサムのひとしなみに幸福を数量化す

るやり方は、耐え難いものと映ったに違いないのである。

さて、もう一度スタンダールが『ウェークフィールドの牧師』から取ったのか、『ヘンリー五世』から取ったのか考えてみよう。まず『ウェークフィールドの牧師』でこの「Happy Few」が使われた箇所を見てみたい。それは小説の比較的書き出しに近い部分、第二章にあつて（先に述べたようにスタンダールが若い頃、英語の勉強のためにこの小説の最初の4ページを暗誦したとすれば、おそらくまさにその4ページの最後部分）、小説の語り手であるウェークフィールドの牧師プリムローズが、自分のことを結婚の推奨者であり、厳格な一夫一婦論者だと語るくだりである。彼は結婚の幸福を力説する幾つかの説教を書いており、とりわけ英国国教会の僧侶が、最初の妻の死亡後に再び結婚するのは不当であると主張したという。「The Happy Few」の言葉が出るのはこの所である。「私はこの問題について自ら二、三の小冊子を發表した。それらは少しも売れなかったので、私はただ幸福な少数者 The Happy Fewのみがそれを読んだのだと思って自ら慰めた。」¹¹

もちろん、語り手プリムローズが、たとえ妻を亡くしても、生涯その唯一人の妻を守りぬくことが国教会の僧侶の道であるとし、それほどに相手に忠実である結婚を幸福とする信念をもっていたとすれば、ここで彼の言う「幸福な少数者」とはどういう人々を指すか言うまでもないだろう。伴侶に対する、ほとんどの人には守れないほどの厳格な忠節心を自らに課すことによって、実は真の幸福が得ることができるのだという、このキリスト教的な逆説を含んだ彼の信条に、理解と共感を示してくれる人を指しているのである。

そしてこの文脈をスタンダールにあてはめてみると、スタンダールもまた、初期の『イタリア絵画史』、『恋愛論』に始まって、小説『赤と黒』、『パルムの僧院』に到るまで、著書の売れないのに苦しみ続けた事実がある。自分の本を出版した本屋に、売れているかどうか尋ねると、「いいえ、一冊も。どうやらあなたの本は聖別されているとみえますね。」と皮肉を言われたエピソードを自ら語っているほどである。「自分の本は1900年になって始めて再版されるだろう（半世紀以上も先である!）」¹² と語るスタンダールは、読者に読んでもらえることがあるかどうか、常に諦めと希望の間をさまよっていたのであつて、そのことを考えれば、『ヘンリー五世』の兵士達を鼓舞する演説よりも、この『ウェークフィール

ドの牧師』の語りの方が、状況的にはぴったりあてはまることは明らかだろう。

ただ、作者のゴールドスミスはこの「The Happy Few」の言葉を独自に編み出したのではなく、もちろん有名な『ヘンリー五世』のせりふから引用したのであって、小説の読者達に、自分がシェイクスピアのせりふをもじっていることを、当然わかってもらえると期待していたことは言うまでもない。1766年に出版されたこの小説は、ブルジョワジーの興隆の早かったイギリス社会を背景に生まれたとはいっても、まだまだ読者は無知な大衆というにはほど遠い、教養ある人々であり、シェイクスピアの名台詞などには通じていた人々だったと考えられるからである。そしてもちろん、スタンダールにこのもじりがわからなかったはずはない。

とすれば、スタンダールがこの言葉を『ウェークフィールドの牧師』と『ヘンリー五世』のどちらからとったのか、という議論自体が無意味だろう。

むしろ事は、ゴールドスミスが原典であるシェイクスピアの台詞のもつ含意をどれだけ、そしていかに汲み取ったのか、そしてスタンダールはそれをどのように受け止めたのか、ということが問題だろう。そしてそれを考えるには、やはり『ヘンリー五世』の台詞そのものに立ち返らなければならない。

『ヘンリー五世』において、「The Happy Few」の言葉が立ち現れるのは、第4幕第3場、若きヘンリー五世が一万の兵を率いてフランスに進攻し、後に名合戦として伝えられることになる「アジンコートの戦い」を戦うその直前、居並ぶ兵士達を前にして行う演説の場面である。百年余りの長きに及ぶことから百年戦争と名づけられたこの英仏間の戦争は、やがてジャンヌ・ダルクの活躍もあって、最後には英国がフランスに所有していた領土の大半を失う形で1453年に収束を迎えることになるが、1415年のこの「アジンコート（仏名アジャンクール）の戦い」は、いつときイギリス軍が盛り返して勝利をおさめ、いわば戦利品のような形で王がフランスの王女を娶るという、イギリスにおいては史上輝かしい事跡であり、特に一万の味方の兵士に対し、敵のフランス軍は五、六万に及んでいた徹底して不利な戦況のさなかの勝利であってみれば、日本における桶狭間の戦いのような、もしくは自国の勝利という意味では日本人にとっての日露戦争における日本海海戦のごとく、イギリス国民にとっては記憶に残る勝利の戦さだった。

そしてヘンリー五世は、「今自国に残っている兵があと一万ここにいてくれた

ら、」と味方の兵の少なさを嘆くウェストモランド伯の言葉を聞きとがめ、

誰だ、そんなことを望むのは？

従弟のウェストモランドか？いや、わが従弟よ、

我々が死ぬべく運命づけられているなら、我々だけで十分ではないか、

我等の国の損失となるのは。そしてもし生き長らえるなら、

その男の数が少ないほど、名誉の分け前は大きくなるわけではないか？

神かけて、ただの一人も多くとは望んでくれるな。

誓って私は黄金など欲しがらない、

誰が私の金で飲み食いしようとかまわない、

人々が私の衣をまともにも気にかけはしない、

そんな上っ面のことを私は願ったりはしない、

だがもしも名誉を欲しがるのが罪だというなら、

わたしこそこの世で最も罪深い人間だ。

いや、ほんとに、従弟よ、イギリスからただ一人の男も来ることを望んでくれるな、

神に誓って私はこんなに大きな名誉を失いたくない、

だって一人でも増えたら、私から奪われることになるではないか、

私の最大の願いが。ああ、一人たりとも望んでくれるな。¹³

と王は不利な状況を、発想を転換させることによって、むしろ軍人達の名誉心をかきたてる梃子として、人々を先導して行く。

そしてその日が聖クリスピンの日であることに言及して、戦勝をおさめた暁には、故国に帰ってからいかにその日が重要な記念日として人々の記憶に残り、祝われ、自分達の手柄が称えられるかを生き生きと描いてみせ、さらにはその古強者が、記憶も新たに祝杯をあげる際には、その口から日常の言葉のように親しげに次の名が呼ばれるであろう、と言って、自らの名前、王ハリー（正式な名ではなく気安げな愛称で言うところがみそである）を筆頭に、名だたる名家の貴族の名を連ねてゆく。

そしてここで、50行にも及ぶこの演説のクライマックスとして、「The Happy

Few」の言葉がヘンリー王の口から洩れるのである。

We few, we happy few, we band of brothers:

For he to-day that sheds his blood with me

Shall be my brother: be he ne'er so vile,

This day shall gentle his condition.

And gentlemen in England, now a-bed,

Shall think their manhoods cheap, whiles any speaks

That fought with us upon Saint Crispin's day.

われらは数少なき者、われらは幸福なる数少なき者、われらははらから同胞の一团である。

というのも、今日共に我と血を流す者は、

わが兄弟となるからだ。その者はもはや卑しき者ではない。

今日この日とその者の身分を貴族へと引き上げるからだ。

そして本国イギリスで、今この時に床にやすらっている貴族連中は、

面目丸潰れとなるだろう。一方で誰もが一人一人声をあげるのだ。

聖クリスピンの日に我々と共に戦った一人一人の者たちが。¹⁴

王はここで、本来の騎士階級である貴族達の名誉心と呼び覚ますことから一歩すすんで、一介の兵士一人一人に呼びかけている。それらの者たちも共に血を流すことによって、いわば王その人の血族となり、貴族に列せられる存在になるのだ、と語ることによって、無名の兵士たちに選ばれし者の恍惚を味わわせ、また高き者との一体感を覚えさせるのだ。そして何度も神の名を引き合いに出すことからわかるように、この背後には、キリストの血を分かち合う、キリスト教の同胞 brothers 精神が溢れている。それと同時に、「数少ない」という一種のエリート主義には、同じくキリスト教的な「狭き門」の精神も背景にある。そうした精神を背景に、ヘンリー王は兵士達の中に連帯感と呼び覚まし、結束と呼びかけるのだ。この紐帯は、人が一团となって戦闘を行う際には、不可欠のものである。ヘンリー五世のみならず、歴史上の名だたる名将は、必ず自分の率いる兵士たち

に向かって、これを鼓舞することにかけては手だれだった。

スタンダールがこの演説の台詞を目にした時、スタンダールの眼前には、自由、平等、同胞愛 *Liberté, Égalité, Fraternité* の旗印のもとに、フランス革命解放軍を率いたナポレオンの勇姿が浮かび、耳には彼の演説に応える並み居る兵士達の歓呼の声が潮騒のように響いたのではなかったか、と私は想像するのである。若きスタンダールこそ、一介の兵士として、一度ならずそうした場に居合わせたのであるから。

そしてスタンダールにとって、シェイクスピアその人も、常に心の友であり続けた。先に述べたように、少年時代にルトウルヌール訳のシェイクスピアを立て続けに読んでいたスタンダールは20才を過ぎた頃、軍務を一時離れて、劇作家になるべく本格的な修行を始める。その際英語の原作を含めてシェイクスピアを精読し始めるのだが、その頃彼は親しい妹ポーリーヌにあてて、次のような手紙を綴っている。

心も体も苦痛に責めたてられ、才気を発揮するにも倦みつかれていると、理解ある心 *a comprehensive soul* に出合った時には、ほんとに嬉しいものだ。この3語の英語を使うのを許しておくれ、気晴らしになるのだ。私はこの言葉がとても好きだ。ほとんど翻訳不可能な、素晴らしいものを内に含んでいるんだ。ドライデンが、シェイクスピアが理解に富んだ心根を持っていたことを言うのに、この言葉を使っているんだ。あらゆる苦悩、あらゆる喜びを理解する、きわめて高度の同情心、共感の力を持った魂をね。感受性に病んだ人間にとっては、バルサムのように心からの慰めとなるのだ。理解ある心に出合うことにしか幸福はないと知りながら、そんな人は存在しないのだと自分に言い聞かせることほど、言うも愚かな、つらいことはないよ。¹⁵

当時の、孤独感に苦しめられていた若きスタンダールにとって、現実のこの世には見出せない人を地上以外の場に求め、その「*The Happy Few*」の内の最大の一人がシェイクスピアその人だったことが、この書簡から覗かれる。

その伝でいけば、ゴールドスミスが『ウェークフィールドの牧師』において、この「*The Happy Few*」の言葉を援用した際にも、いかにもイギリス人らしい、

己を笑う諧謔とユーモアに包みながらも、よくシェイクスピアの台詞の、その逆説を含む精神を汲み取っていたというべきだろう。主人公のプリムローズ牧師は、妻が亡くなったら二度と妻帯はしない、という現実とはなかなか折り合いにくい厳格な規律を己れをふくめた英国国教会の聖職者達に課し、その理想主義はなかなか人に受け入れられるものではないと知って、苦笑いを噛み締めつつ、それでも自説に共感してくれる人をひそかに「The Happy Few」と称えるのである。

しかもこの場合のHappy Fewとは、たとえば伴侶に万一のことが起こっても、ひとたび妻と定めた人には生涯をかけて忠誠を尽くす、それを幸福とする人々をさすのであってみれば、先のスタンダールの、失墜したナポレオンへの表明を禁じられた想いと符号する。

そしてスタンダールにとっても、文筆活動は、(名誉欲や金銭欲にかられてのことも当然あったろうが、それは別として) 著作の創造を通じて、いわば想像上の精神の共同体を築く営為だったのだ。そして「To the Happy Few」の献辞は、いわばその証しとしての、刻印だったのである。

生涯の大事な作品群に、スタンダールがこの刻印を押すたびに、シェイクスピア、ゴールドスミス、またその他諸々の人々(ロラン夫人やグロ氏のことはすでに述べた)が幾重にも重なって、彼の脳裏をかすめたに違いないのである。

そしてとりわけナポレオンである。シェイクスピア原典のヘンリー五世の、居並ぶ兵士を前にしての演説が、スタンダールにとっては戦場の陣営において、兵士一人一人に訴えかけるナポレオンの姿を彷彿とさせたであろうことはすでに述べたが、彼がこの献辞を付した作品群をよく見ると、とりわけナポレオンの面影、もっと言ってよければナポレオンへの思慕の揺曳する作品群である。『イタリア絵画史』(1817)も『ローマ散策』(1829)も、スタンダールが弱冠17才でナポレオン軍のイタリア進攻を自ら体験した、その青春の感激と熱情を味わった土地の関する作品である。時代が変わり、ナポレオンが失脚して、みずからも失墜した中年の男が、いわば「つわものどもの夢の跡」を、そこここに感慨をもって訪れる記なのである。そして小説『赤と黒』(1830年)では、作者の若き身代わりともいえる、主人公ジュリアン・ソレルが、家庭教師の雇われ先の邸の寝台の下に、そっとナポレオンの肖像画を隠し持つ。『パルムの僧院』(1839)では、今度は主人公の少年ファブリスが、北西の空へと飛翔する鷲(ナポレオンの表象)に天啓

を受けて、自ら志願してワーテルローの戦いに従軍する。

ナポレオン失脚から王政復古、そして7月革命、ルイ＝フィリップ王政へと続く政治の激変をかいぐり、ようやく1830年7月革命以降は、スタンダールは小説『赤と黒』で、主人公のナポレオン崇拜熱をおおびらに表現できるようになるし、また自ら新政府のもとでイタリア、ツィヴィタヴェッキアの領事の職を得ることになるが、それまでの彼の目には、かつての同僚達が身すぎ世すぎのために、敵方であった王政政府に対してしきりに獵官運動をしたり、また続々と任官していく姿ばかりが映っていた。彼自身の心にももちろん葛藤はあっただろうが、その時にもスタンダールの脳裏には、「去る者は去れ」「われわれは少数の幸福者なのだ」と呼びかけるヘンリー五世の姿が、ナポレオンの姿にだぶって写っていたと考えるのは、想像のしすぎであろうか。

しかしスタンダールはその子供時代、はやくに亡くした母の面影を慕いつつ、周りの人間を、たとえば家庭教師のライヤンヌ師や叔母セラフィニーを極右の偽善者として敵視し、同じ妹でもゼナードは父を含めた彼らのスパイとして嫌悪し、妹ポーリーヌのことを味方と考えるというふうに、幼少の頃から自分の周囲の人間を敵と味方に峻別をすることの強烈な人だった。そのスタンダールが、自著をかつての上官ナポレオンに捧げようとして阻まれ、代わりに置いた言葉であってみれば、そしてスタンダールという人が、人への想いを隠しつつ露わにし、露わにしつつ隠す人であってみれば、この想像もあながち事実からかけ離れているとは思えないのである。

凡 例

文中に引用した英語およびフランス語の原文の翻訳は、全て筆者による。

なお、スタンダールの著作の引用は、書簡以外は全て

Stendhal, *Oeuvres Complètes*, Cercle du Bibliophile, Genève, 1968.

シェイクスピア作品の引用は、

The New Shakespeare, Cambridge University Press, 1974.

によった。

注

- ¹ Stendhal, Correspondance I, ed. Henri Martineau et V. Del Litto, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1968, p.822.
- ² Stendhal, Vie de Henry Brulard I, chap. 2, p.17.
- ³ Stendhal, Souvenir d'Egotisme I, chap.1, p.3.
- ⁴ Stendhal, Romans et Nouvelles, ed. Henri Martineau, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1952, Notes et Variantes, p.1436.
Stendhal, La Chartreuse de Parme, ed. A. Adame, Garnier, 1973, Notes, p.702.
- ⁵ Stendhal, Vie de Henry Brulard II, chap. 30, p.138.
- ⁶ Stendhal, Vie de Henry Brulard II, Annexes, pp.425-426.
- ⁷ Stendhal, Journal II, 1810年3月20日付, p.369.
- ⁸ Stendhal, Journal III, 1808年5月3日付, pp.300-301.
- ⁹ Cf. Stendhal, Mémoires d'un Touriste I, p.416.
- ¹⁰ Stendhal, De l'Amour, chap. 51, p.44.
- ¹¹ Oliver Goldsmith, The Vicar of Wakefield, Oxford University Press, 1981, p.13.
- ¹² Stendhal, Souvenir d'Egotisme, chap. 6, p.75.
- ¹³ Shakespeare, King Henry V, act. IV sce.3 ll.18-33.
- ¹⁴ Shakespeare, King Henry V, act. IV sce.3 ll.60-67.
- ¹⁵ Stendhal, Correspondance I, ed. Henri Martineau et V. Del Litto, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1968, 1804年9月末から10月初旬, p.155.